

「闇」について：ゴールディングとロレンスの場合

吉村，治郎

<https://doi.org/10.15017/2332613>

出版情報：文學研究. 85, pp.49-65, 1988-02-29. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

「闇」について

—ゴールディングとロレンスの場合—

吉 村 治 郎

I

一般的に言って、理性や知性が人間の持つ明るい面だとすれば、本能や直感の支配するいま一つの非理性的側面は、光に対して「闇」、または「暗黒」の領域といえる。ロレンスとゴールディングはそうした人間内部の「闇」を共に“darkness”と呼び、その「闇」の領域に人間の本質の所在を認め、その探求と表現をもって己れの文学の本領とする作家である。

しかし、当然のことながら、両作家の使う“darkness”という言葉は外見の字面こそ同じであれ、その意味する所は似て非なるものである。例えば、ロレンスの「闇」は病める現代人が今一度回帰すべき再生と復活の場であるのに対して、ゴールディングのそれは、文字通り、人間存在の汚点とも言うべき原罪の巢食う暗黒の領域を示す。つまり、ロレンスは「闇」を肯定的に、ゴールディングは否定的意味に使っている。ここに先ず両者の決定的相違がある。勿論、仔細に調べれば二つの「闇」には部分的に重なる点もいくつか認められる。以下、小論では、主として、人間を精神と肉体に分けて考えるキリスト教的観点との比較を通して、両作家の思想的中核をなす二つの「闇」を検討し、それによって、先ず両者の相違点と類似点を、次いでそれぞれの「闇」の特質の一端を明らかにしたい。

II

人間を精神と肉体、または神性と獣性の闘争する存在と見なすのはキリスト教の人間観であるが、ゴールディングの人間観も概ねこれにならうものと言ってよい。従って、キリスト教が理屈や論理では説明し切れない人間の非理性的暗黒面を“darkness”,即ち「闇」と呼ぶように、ゴールディングの「闇」もほぼ同じ領域を意味している。Arnold Johnstonの指摘の通り、ゴールディングの人間観も「闇」も共にキリスト教の伝統的思想に則ったオーソドックスなものなのである。⁽¹⁾このことはゴールディングの小説中の中心人物の性格付けや筋の展開の仕方にはっきり読み取ることができる。例えば、第四作目の*Free Fall*,第五作目の*The Spire*はキリスト教的人間観に基いた典型的な小説である。二つの小説の中心人物は、それぞれ、Mountjoy, Jocelinと呼ばれる男性であるが、共に精神と肉体の葛藤に苦しむ。そして前者のマウントジョイは、地上的な肉体の世界をさまよった挙句、己れの肉性と同時に、己の内なる天上的靈性の存在も併せて自覚するに到る。一方聖職者ジョスリンは、女性をきっかけとして彼の精神は一度肉体に敗北するが、この苦い体験を通して真の自己認識に達する。人間は精神的存在であるのと同程度に、あるいは、それ以上に肉体という罪深い「闇」を背負った性的存在であるという認識である。ここでは、後者ジョスリンという人物をさらに詳しく見ることにより上述の点を具体的に確認することとする。

「闇」はゴールディングの場合、人間の内に巢食う原罪的悪を意味し、主として性的衝動をきっかけとしてその姿を露わにする。しかし、普段は理性もしくは精神の監視と統制下にあり表には現われない。が、事あれば主役となって躍り出る機会を狙って雌伏している。人間の精神は絶えずそうした肉体の「闇」から侵略を受け支配の危険にさらされている。これが人間に対するゴールディングの考え方であるようだ。ゴールディングは人間内部の精神

と「闇」のそのような聞き合いを表現するために、登場人物を意識と無意識の両方面から描き分ける手法を採っている。ジョスリンもその応用例である。

大聖堂の司祭という職業から明らかなようにジョスリンは先ず精神生活者の代表としての地位が与えられている。彼自身そのことを十分意識しているばかりでなく自分は神より選ばれた人間だという選良意識さえ抱いている。そして尖塔建設という長年の夢を実行に移す際にも、その建設動機は神への純粋な愛と信仰心に基くものであって、それ以外の私心や邪心は天地神明に誓って一切ないという恐ろしいばかりの不動の確信を持ち、決して疑いをさし挟むことはない。己れの精神性に対するこうした自己陶酔的な自負心は絶大なもので、ために却って、彼は他人の意見を聞く耳を持つことができない。尖塔建設に反対する Anselm 神父の異議申し立ても、地盤の脆さを指摘して建設に難色を示す棟梁 Roger の恐れと諫言も何の歯止めとならない。彼はこのように少くとも意識の上ではひたすら神に仕える精神生活者をもって自任する。しかし、己れの精神の高邁さに盲目的ともいえる無反省な自信を持つあまり、それが実は高邁さという体の良い衣を纏った傲慢さであることに気付かない人物として描かれている。

しかし一方、ゴールドディングはジョスリン自身気付いていないもう一人のジョスリンの存在も小説の最初から度々暗示している。例えば、尖塔建設に際しての棟梁ロジャーによる地盤調査に関するエピソードは深い意味を持つシーンである。

塔建設の依頼を受けたロジャーは前もって地盤の状態を確認するが、その結果、意外にも教会は沼地の上に建てられたものであることが判明する。ロジャーはこの動かし難い事実を実地によって依頼主のジョスリンに示して尖塔を増築することの無謀さと危険を告げる。しかし結果は上述の通り、彼の制止は一蹴される。そればかりか、建設に乗り気でないロジャーの機嫌をとり結ぶためにジョスリンは、人を導く司祭の立場にありながら、ロジャーと人妻 Goody との不義密通を見て見ぬふりをして黙認する。しかも教会の境内が

その現場として使われているにも拘らずである。

このエピソードは一見何の変哲もない外部の出来事としての体裁をとっているがここにはジョスリンの内面の「闇」を描くゴールドディングの巧みな手腕を見ることができる。このエピソードは単に場面設定のための一翼を担うにとどまらず、実は聖職者ジョスリンの隠された精神構造と密接した極めてアイロニカルな象徴的意味さえ帯びているのである。つまり、底無し沼に支えられた教会は彼の危うい精神性を、下の沼地は彼自身の内奥の「闇」を表わしている。しかもロジャーの指摘にも拘らず、底の沼地の存在を敢えて無視するジョスリンの頑な行為は、あくまでも自己の精神性に拘泥して内奥の「闇」に目をふさごうとする無意識の自己逃避と自己偽瞞に通ずる。その意味で、ロジャーは意図せずしてジョスリン自身の隠された内面風景を暴いて見せたといえる。

ところで *The Spire* は大部分ジョスリンの目を通して語られる小説であるが、視点をジョスリンとしたところにも、内面の「闇」を効果的に、しかも自在に無理なく描出しようとする作者の工夫が見られる。これによってジョスリンの目を通して描かれる外部の風景は単に無色の客観的風景ではなく、それが意識的なものであれ、無意識的なものであれ、とりもなおさず彼の内面の心の動きを映し出す心象風景として機能させることができるからである。ジョスリンが教会のモデルを仰向けに横たわる男性の姿に喩える場面はその効果的な応用といえるだろう。彼は次のように教会を眺める。

The model was like a man lying on his back. The nave was his legs placed together, the transepts on either side were his arms outspread. The choir was his body; and Lady Chapel where now the services would be held, was his head. And now also, springing, projecting, bursting, erupting from the heart of the building, there was its crown and majesty, the new spire.⁽²⁾

ジョスリンは少なくとも自分の意識の上では、色欲、物欲、名誉欲、といった世俗的煩いを超越して神に仕える清い身をもって聖職者を自任し、己れの精神に絶大な自信を持っていた筈である。ところが非の打ちどころのない精神主義者を自任する筈の彼は無意識のうちに精神の象徴ともいべき教会を、精神と敵対する生々しい肉体のイメージで眺めている。しかも、「身廊」（“nave”）を揃えた両足、「袖廊」（“transepts”）を広げた両腕、「聖歌隊席」（“choir”）を胴体、「マリア聖堂」（“Lady Chapel”）を頭、とする連想の自然な流れからすれば、彼が現在建設に躍起になっている尖塔は冠に喩えられているとはいえ、その意味するところは男性の性的シンボルであることは想像に難くない。肉体とそれに必然的に付随する性のイメージで捉えられた教会堂の風景は彼が気付いていなかったか、または直視したくなかった隠された彼自身の内面風景そのものであることは言うまでもない。そして、この場面は先に取り上げた伏線としての地盤調査のエピソードにこめられた象徴的意味の裏付けにもなるのである。事実、物語の進行に伴って、尖塔を建設しようとするジョスリンの心のうちには表むきの美しい大義名分とは裏腹に人妻グッディに対する性的欲望が潜んでいたことが明らかとなる。

神への信仰の証しという崇高な目的に端を発した尖塔建設は、皮肉なことに、内的には自己偽瞞と自惚れを露わにし、外的にはロジャーとグッディとの姦通とパンガル殺害を招くといった実に生々しい擾乱を惹き起こす結果となる。

このように、ゴールドディングの「闇」とはなによりも先ず性的衝動を契機として顕現し、人間の精神を罪深いカオスの状態に突き落とす盲目的かつ破壊衝動的な暗黒の力を言う。しかも、人間の内に潜むこの聖ならざる「闇」の力は外から来たものではなく、人類の始祖とされるアダムとイブから受け継いだ原罪的なものとされている。“Guilt comes before the crime and can cause it”⁽³⁾と述べるマウントジョイの言葉はその証しと言える。そして、この悪の力に抗し得る唯一の武器としては、自己幻想を放棄することにより、

己れの内なる「闇」の存在を謙虚に受けとめる自己認識の勇気しかないのである。

では、「闇」が人間にとって避け難い宿命的汚点だとすれば、人間がこの「闇」を先天的に内部に抱え込んでいるという事実はどのような人間的意味があるのであろうか。以下、尖塔の持つ意味の多義性に注目しながら若干の検討を加えることとする。

Arnold Johnstonの指摘する通り、ジョスリンの内なる「闇」が次第に明るみになるに伴って、尖塔の象徴的意味も多義性を帯びてくる。⁽⁴⁾

最初、ジョスリンが己れの精神性に絶大な自信と確信を抱いて建設に情熱を傾けていた時には、尖塔は雄々しく天を目差す信仰精神の証しであると同時に、動物と違って宗教的精神生活を営むことができる人間存在たることの栄光と勝利を表わすものであった。

しかし、自己偽瞞が明らかとなり、およそ人間がなす仕事には「汚れのない仕事」というものは決してない。神がどこに存在するかは神のみが知る⁽⁵⁾という認識を得た時には、尖塔は、その資格もないのに神へと近付こうとする身の程知らずな人間の倨傲の象徴そのものへと変貌する。

さらに、ジョスリンが内なる「闇」をはっきり自覚した後の尖塔は、「闇」故に本来、神の御座である天空へは届かぬ不浄の身ながらも天へせめてもの憧れを託そうとする人間の殊勝な心の表現ともなり、また不可能と知りつつも空しく天空を憧憬せずにはいられない人間存在の悲哀を象徴するものともなる。

いうまでもなく、尖塔の多義性は、完全なる神でもない代りに、完全なる獣でもない人間の人間たることの喜びと悲しみ、栄光と汚れを同時に象徴するものなのである。そして、それはまた、「闇」の存在なくして人間の聖なる活動もない、という逆説に他ならず、「闇」の力にも二次的な存在意義を認めている点はキリスト教的な「闇」の観念とは多少異っている。ここに、光を善、「闇」を悪とする単なる図式的把握を越えたゴールディングの「闇」の独自性が窺われる。

III

ロレンスの「闇」を検討するには彼が人間をどのように見ていたかを最初に調べる必要がある。“deeper than love”という詩の中で「愛以上に深遠なものがある」⁽⁶⁾と述べた後、彼は次のように続ける。

Love is a thing of twoness
But underneath any twoness, man is alone

And underneath the great turbulent emotions of love, the violent
herbage,
lies the living rock of a single creature's pride, the dark, naïf
pride

And deeper even than the bedrock of pride
lies the ponderous fire of naked life
with its primordial consciousness of justice
and its primordial consciousness of connection,
connection with still deeper, still more terrible life-fire
and the old, old final life-truth ⁽⁷⁾

この詩を見る限りロレンスは人間を三層に分けて考えているようである。一つは一番表層の意識領域である。言うまでもなく、ここは人間相互の関係である愛や、知的判断などの、いわゆる精神生活が営まれる領域である。人間を肉体と精神に二分するキリスト教的考えに従えば、精神に該当するものがこれである。

ロレンスはこの表層のさらに下位の無意識領域に目を向けている。ここはもはや精神領域とはいえず、いわば生理的、ないしは肉体的意識領域といってもよいが、彼はここをさらに二つに分けている。一つは「生物としてのプ

ライド」(“creature’s pride”)が宿る「生きている岩盤」(“living rock”)であり、もう一つはさらに下部の、マグマとも称すべき「原初の生命の炎」(“fire of naked life”)が燃えている最深の内奥領域である。しかも見逃してならないことは、この「原初の生命の炎」は「さらに恐しい生命の炎、真に古い究極的な生命的真理」(“still more terrible life-fire / and the old, old final life-truth”)という始原的かつ宇宙的生命と連繫した「根源的生命」であることである。そして肉体の生命の炎とも呼ぶべき、この「根源的生命」の支配する暗黒の領分こそが、まさにロレンスのいう「闇」なのである。

ところで、この人間内奥の「根源的生命」をロレンスは「闇」即ち“darkness”と呼ぶ他に時として、“impersonal self”, “otherness”とも表現する。おそらくここは意志の支配力も及ばず、人格や個性とも無縁な識國の領域である故に「没個人的」(“impersonal”)であり、「他者」(“otherness”)であるのだろうと考えられる。また、ロレンスが自然の本質を同じく“otherness”という言葉で表現することからも、「根源的生命」は人間のみならず固有な生命ではなく、鳥、花、草、木、といった自然の生命と共通した普遍的生命であることが推察される。

ロレンスの「闇」を簡単にみてきたが、それは肉体の生命の炎ともいうべきものであった。そして、それはほぼ肉体と同義であると考えて差支えない。勿論、ロレンスにとっては、肉体、即ち「闇」はキリスト教やゴールドディングの説く如く様々な悪の宿る暗黒の場ではない。それは不浄なものではなく聖なる炎そのものである。そればかりでなく、肉体は精神以上に賢明な叡智の宿る場なのである。そのことは、「われわれは精神においては誤る。しかし、われわれの血が感じ、信じ、そして述べるところのものは常に真実である」(“We can go wrong in our minds. But what our blood feels and believes and says, is always true.”)⁽⁸⁾と断言するロレンスの確信からも明らかであろう。

ところでロレンスにおいては「根源的生命」へと回帰することこそが生の

充足を獲得し、生の開花へと至る唯一の道であることはいうまでもない。しかし、その回帰への道を辿ることは容易ではない。ロレンスによれば、一つには人間が知性や理知を与えられている故にものを考えざるを得ない存在だからである。彼は次のように述べる。「人間は空白の精神のままでは眠ることさえ不可能だ。精神は空白になることを拒否する。頭脳の挽臼は生命の流れが続く限り回り続ける」。⁽⁹⁾ さらにロレンスは「人間は家畜化された動物である」と述べた後、次のように言う。「人間はものを考えるが故に天使よりいささか劣り、多少猿にも劣ることもある」。⁽¹⁰⁾ ではなぜ人間は思考能力故に猿以下になるのか、また人間が思考能力を持った精神的存在であることと、「根源的生命」即ち「闇」への回帰とはどのような関係にあるのか。以下それを検討することとする。

ロレンスは‘Morality’と題した詩の中で、人間と他の動植物との相違について次のように詠っている。「人間のみが徳に悖る／獣や花はそうではない／なぜならば、哀れな獣である人間は己れ自身を眺める対象と化し／己れを鏡に映して見知るが故にである」。⁽¹¹⁾ 人間は思考能力を与えられているが故に他人は勿論、自分自身をさえ観察の対象として眺めることができる。換言すれば、時の経過とともに流れてゆく自然的意識以外に、自分というものを客観視するもう一つの独立した意識を持つ人間は分裂した二重の意識を持つ存在だということである。これに対し、他の動植物は思考能力がない代わりに、意識の分裂を知らない純粋な生命である。従って、自然の命ずるままに与えられた生命の四季を抗うことなく受容し、その生命を全うする。たとえ泣き叫ぶことはあっても、それは生命そのものの純粋な叫び声であって、何の思惑も邪心も入っていない。このように、己れの宿命に対して完全ともいえる自己放下をしている動植物は人間の見地からすれば、自由も選択権もない隷属的生き方しか与えられていないかに見える。しかし、それはあくまでも自己意識という牢獄に繋がれた人間の目から見てそう見えるのであって、一見、自由を否定されているかに見える草木は、実は宇宙の意志に対する絶対的帰

依によって、濁りのない全き生命の保証と無限の転生の道を獲得するという栄光に浴しているのである。そして、この絶対帰依による全き生命の姿こそ、草花という自然の生命のもつ濁りのない清らかな美しさに他ならない。そして、それは意識の分裂を知らない草花にして始めて可能となるいわば彼岸の美しさである。ロレンスは人間以外の自然界におけるこうした草花の生命の姿の中に「根源的生命」の完璧な発露と理想を見ているとあってよい。このことは、「根源的生命」を表わす時に使われている“otherness”という言葉が、同じく自然の本質を表現する際にも転用されている事実からも容易に推察される。

一方、人間は草花の享受している恩沢に浴することは難しい。なぜならば、毒蛇が口中に毒を秘めるように、人間は思考能力という禁断の毒を含んでいるからである。人間の内部にも自然の草花と共通する「根源的生命」が存在することは先に見た通りであるが、人間は思考能力を与えられている故に通常は精神生活を否応なく強いられているばかりか、思考を停止することに恐怖心さえ覚える。こうして絶えず精神的かつ知的レベルでの生活を強いられている以上、さらに下部の「生命的岩盤」はおろか、最深部の「根源的生命」レベルまで降下することは容易ではない。従って、ロレンスにいわせれば、人間は獣や草花以下の「哀れな獣」となるのである。

また、ロレンスは、人間に精神生活を執拗に迫るもう一つの元凶としてキリスト教を敵視している。キリスト教の教えは、精神偏重、肉体軽視の傾向を持っているからである。⁽¹²⁾

IV

前章ではロレンスの「闇」をキリスト教と彼の人間観との比較において見てきたが、次に自然及び性との関連を調べることにより、「闇」の思想的本質をより明確にしてみたい。

人間は思考能力を持つ故に「根源的生命」への回帰の道が閉ざされていた。では人間は他の草花の享受している生の充足を得ることは絶対不可能であるかということ、そうではない。ロレンスはその可能性を自然及び性への接近の中に見い出している。では自然への接近はどのような意味があると考えられているのであろうか。ここでは主として、*Sun* という短篇小説を例にとって考えることにする。

Sun の主人公は若い人妻 Juliet であるが、話は、彼女がニューヨークから療養のため太陽の光溢れるギリシャの地に到着し、そこで自然に序々になじんでいくところから始まる。医者への勤めもあって彼女は到着早々から日光浴に精を出す。しかし、最初はいかに太陽に対してとはいえ、肌を露わにすることに抵抗感と苦痛を感じていた。なぜかといえば羞恥心からというよりも、太陽に対して己の身体を完全に捧げなければならないという全面的な受身の状態、換言すれば服従の状態を強いられるからであった。以前は「いつも自分は自分自身の主人であった」⁽¹³⁾ ような暮しをしていた文明都市ニューヨークからやってきた自意識の強い彼女には、いかなる形のものであれ、屈従とは苦痛以外の何者でもないことは想像に難くない。しかし、自然は本来無私である。自然の無私性の前に抵抗感と苦痛は序々に和らいでゆき、彼女は次第に自分が変化するのを覚え、それと同時に太陽との交感を感じ始める。

She was given to a cosmic influence. By some mysterious will inside her, deeper than her known consciousness and her known will, she was put into connection with the sun, and the stream of the sun flowed through her, round her womb. She herself, her conscious self, was secondary, a secondary person, almost an onlooker.⁽¹⁴⁾

ここには、太陽の影響を受けて彼女の内部で二つの意識が交代する様子が

描かれている。一つは“her known consciousness”とも“her conscious self”とも表現されているが、これは普通の意味での意識といってよい。いいかえれば、知的あるいは精神的活動を司る意識であり、人間は通常はこの「知的意識」レベルで生きている。一方もう一つの意識は“mysterious will inside her”と呼ばれているが、簡単にいえば「血の意識」(“blood-consciousness”)である。「血の意識」は文明社会で生活する時には眠っているが、自然との接触とか性的経験を契機として覚醒し、やがて「知的意識」を圧倒して支配的になる。ジュリエットが経験しているのは、眠っていた「血の意識」が目覚めて、「知的意識」にとって代わる変化であることは言うまでもない。従ってこの変化を体験した後、彼女は自らを“another being”⁽¹⁵⁾とさえ感じるのである。彼女は「血の意識」レベルで生きている別人、即ち「他者」(“otherness”)となっているのだ。

また、この「血の意識」は母性愛以上に強力かつ本質的な根源的意識であることが短篇中で示されている。例えばジュリエットが愛しい筈のわが児を思わず邪険に扱う場面にみられる。日光浴によって太陽から神秘的感化を受けた結果「血の意識」レベルで生きようになったジュリエットは、母の愛撫を求めて走り寄るわが児に対して母性としての本能的愛情でもって応えてやるができない。いつもと違う無感動さにジュリエット自身ですら一瞬戸惑いを覚える位である。しかし一方、太陽との神秘的繋がりは依然として感じている。

ロレンスは1927年の、Burrow宛の手紙の中で“man is related to the universe in some ‘religious’ way, even prior to his relation to his fellow man”⁽¹⁶⁾と述べて、人間と宇宙との繋がりは人間同士の関係に先行する先験的なものだとしているが、ジュリエットは今まさしく太陽とのそのような本然的關係に復帰したのである。

以上のことから次のことが言えるであろう。まず、自然は人間に「他者」(“otherness”)としての経験をもたらすということ。このことは、ジュリエ

ットが太陽との交感を通して「血の意識」レベルまで降下した結果、自分を“another being”, 別言すれば“otherness”と自覚するに到ったことから明らかである。そして、注意すべきは、太陽との交感はなによりも知性や理知によって果されるのではなく、肉体を通して成就されるという点である。ジュリエットと太陽との交感を可能にした「血の意識」は精神に属するものではなく、なによりも肉体の血潮とも呼ぶべき意識であったことがその証しである。

また性的交渉も同じく人間に「他者」としての経験をもたらし、内なる「根源的生命」への回帰を可能にする一つの機縁となる。例えばロレンスの‘New Heaven and Earth’という詩を見れば明らかである。妻フリーダとの体験に基いて書かれたこの詩の中で、性的体験を通して知る妻の本質は、ロレンスに特徴的な“the other”, 即ち「他者」という言葉で表現されている。⁽¹⁷⁾性的体験は「他者」なる経験への機縁となり得るとするロレンス独特の神秘的性哲学を物語るものである。

「根源的生命」への回帰とは、内なる「闇」への回帰であったが、ではこの回帰はどのような思想的意義があるのであろうか。いま一度 *Sun* という作品に即して考えてみたい。

Sun はロレンス独特の哲学に基いて、人間と自然との神秘的交感を追求した作品として読めることは先に述べた。しかし、この作品は見ようによっては、キリスト教文明から自然への移行の図としても読むことができる。そして、この図の意味解明が上に述べた「根源的生命」への回帰の意味を解き明かす手がかりとなると考えられる。

ジュリエットはギリシャに療養に来る前はニューヨークという文明都市に住んでいた。従って彼女が現代文明やキリスト教の洗礼を十分受けていたことは間違いない。とはいえ彼女が文明の申し子として野蛮を憎み粗野を嫌い、教義に忠実であるという外見上の影響を蒙っているという意味での影響ではない。キリスト教文明はなによりも精神的かつ知的レベルでの生活を人間に

否応なく強要する点こそロレンスが問題とする所である。ジュリエットが文明都市ニューヨークで受けたのはそのような精神不眠の強要である。従って彼女は次のようにニューヨーク時代を述懐するのである。「彼女はいつも自分自身の主人であったし、自分が何をやっているかについても、いつも意識的であった。そして、いつも自分を律するのに汲々としていた」(“She had always been mistress of herself, aware of what she was doing, and held tense in her own command”)。¹⁸⁾文明社会では「私」という意識を忘れることができないのである。こうした自意識過剰の傾向をロレンスは現代文明病の一つと見なしている。

一方、極度の精神の緊張を強いられていた彼女は自然豊かなギリシャの地で一度太陽の感化を受け始めるに及んで次第に変化してゆく。自分という意識は次第に消え、遂にはニューヨーク時代とは全く別の自己認識を得る。即ち、自分も子供も蛇もその場の一部だと知るに到る。これは単に自分、子供、蛇、の三者が情緒的調和の状態にあることを意味する以上のものがある。即ち、彼女は自然の一部としての人間本来の姿を自覚したのである。いいかえれば彼女は子供ともども、宇宙の前においては蛇と同列の位置に置かれていることを、頭によってではなく、「血の意識」によって体験的に知ったのだ。しかも、蛇はロレンス文学においてはサタン化身ではなく、「根源的生命」そのものを体現する神聖なる「他者」であることを考慮すれば、彼女が蛇と同列ということは、彼女自身もまた「他者」なる存在へと変貌したこととなる。彼女と蛇の同質性は色彩の同質性によって示されている。例えば、蛇の色は“gold-brown”となっているが、日光浴によって日焼けするにつれて彼女と子供の肌の色もそれぞれ“gold-brown”, “red-gold”と表現され、蛇と同じか、またはそれに近い形容となっている。¹⁹⁾そして、こうした自然の世界は文明とは相容れぬ敵対関係にあることがニューヨークから尋ねて来た夫 Maurice との対照によって示されている。例えば、ジュリエットと子供はその場の一部として自然との調和の状態にあるのに対して、ニューヨークから

来た夫は「場違い」（“out of place”）とも、「インクの染み」（“a blot of ink”）とも見なされている。⁽²⁰⁾しかも、彼女と子供の肌は蛇と同じ“gold-brown”であるのに対して、夫は“grey suit”と“grey hat”を身につけ、“grey”の顔をし、“grey merchantile mentality”をもった男と形容され、“grey”という言葉の意図の多用によって、文明世界では生きながらの死しか与えられないことが表明されている。⁽²¹⁾

以上の点から推してジュリエットは、ニューヨークからギリシャの地に移動することによって、キリスト教文明的な自己認識から広大な宇宙自然的レベルでの自己認識へと移行したといえるであろう。

考えてみれば、人間と自然とを規定するキリスト教のやり方は、人間を上位に置き、他を下位に置くという、いわば人間主体の上下関係の思想である。人間は万物の尺度であり霊長とする考え方に如実に表われている通りである。これに対して、人間も自然の一部にすぎず、他の動植物も同じ重さの生命を分つ者とする東洋仏教的考え方は、上下ではなく、水平的な人間認識といえる。その意味で、ジュリエットは西洋キリスト教的な垂直の人間認識から、東洋仏教的な水平の人間認識へと移っていったと言ってよく、ジュリエットが“darkness”への回帰によって経験したのは、まさにこの人間認識の変化であることは論を待たない。

V

ゴールディングとロレンスの「闇」を、人間を精神と肉体の複合体と見なすキリスト教的観点から比較してきたのであるが、両者の「闇」は共に人間の非精神的領域を意味する点では共通していた。しかし、「闇」に対する両者の思い入れは全く正反対である。

ゴールディングはキリスト教と同じく、「闇」を否定的に見ていた。精神が神より与えられた光明だとすれば、「闇」はその精神を籠絡し、陥れようと絶

えず狙っている破壊衝動的な悪の力であった。そしてそれは人間存在に拭い難く染みついた原罪的汚点であった。

一方、ロレンスの「闇」は肯定的なものであった。ゴールディングの場合とは異なり、「闇」は精神を圧迫したり侵略する攻撃性もなければ、人間を罪深いカオスの状態に突き落とす原罪的悪の力でもない。却ってそれは生命の開花、転生、復活を約束する神聖なる炎と見なされていた。

そしてロレンスが否定するのは「闇」ではなく、精神の方である。彼は精神を人間に消え難く押された墮落の極印と見なしている。なぜならば、精神作用の一機能である思考能力は人間に絶えず知的レベルでの生活を強制し、生命の開花を約束する「血の意識」を抑圧するからである。そしてこの思考能力故に人間は、純粋な全き生を享受している他の動植物より一段劣るとされてきたことは既に見た通りである。こうした点はゴールディングの考えとは決定的相異がある。

また、ロレンスの「闇」は肉体の生命の炎ともいうべきもので、これは人間のみならず、広く宇宙、とりわけ草花鳥獣といった自然の生命と共通する「根源的生命」であった。そして忘れてならないことは、「根源的生命」、即ち「闇」への回帰は性的体験や自然との肉体的交感を契機として始めて成就されるという点であろう。いずれにしても「闇」に関するロレンスの思想は、精神偏重、肉体軽視の傾向があるキリスト教精神とは真向うから敵対する思想である。

とはいえ、ロレンス文学はその性質上肉体強調の傾向を必然的に伴うのは当然であるとしても、脅迫観念じみた性的イメージの氾濫と、その反動としての、精神的かつ知的なものへの必要以上の攻撃と呪いは少々異常ともいわなければならない。この異常さこそロレンス文学の隠された一面を物語っていると思われる。つまり、異常ともいえる彼の肉体賛美の文学は、生来病弱で、あまり健康にも恵まれなかったロレンスの夢願望的な一面を持っているのではないかということである。

注

- (1) Arnold Johnston, *Of Earth and Darkness* (Columbia : University of Missouri Press, 1980). p. viii.
- (2) William Golding, *The Spire* (1964 ; rpt. London : Faber and Faber, 1986), p. 8.
- (3) William Golding, *Free Fall*(1959 ; rpt. London : Faber and Faber, 1979), p. 232.
- (4) Johnston, p. 80.
- (5) Golding, *The Spire*, p. 222.
- (6) D. H. Lawrence, "Uncollected Poems," in *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, ed. Vivian de Sala Pinto and Warren Roberts (London : Heinemann, 1972), p. 844.
- (7) D. H. Lawrence, "Uncollected," p. 844.
- (8) D. H. Lawrence, "Letter to Collings," 17 Jan. 1913, in *The Portable Lawrence*, ed. Diana Trilling (New York : The Viking Press Inc., 1947), p. 563.
- (9) D. H. Lawrence, "On Human Destiny," in *Phoenix II*, ed Warren Roberts and Harry T. Moore (1968 ; rpt. Harmondsworth : Penguin Books, Ltd., 1978), p. 624.
- (10) Lawrence, "On Human Destiny," p. 623.
- (11) Lawrence, "Uncollected Poems," p. 836.
- (12) Lawrence, "Uncollected Poems," p. 833.
- (13) D. H. Lawrence, *Sun*, in *Selected Short Stories*, ed. Brian Finney (1982 ; rpt. Harmondsworth : Penguin Books Ltd., 1985), p. 431.
- (14) Lawrence, *Sun*, p. 431.
- (15) Lawrence, *Sun*, p. 431.
- (16) D. H. Lawrence, "Letter to Dr Trigant Burrow," 3 Aug. 1927, in *The Letters of D. H. Lawrence*, ed. Aldous Huxley (London : Heinemann Ltd., 192), p. 687.
- (17) Lawrence, "Look ! We Have Come Through !," in *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, p. 261.
- (18) Lawrence, *Sun*, p. 431.
- (19) Lawrence, *Sun*, p. 432.
- (20) Lawrence, *Sun*, p. 436.
- (21) Lawrence, *Sun*, p. 438.